慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コムミュニティーとしての都市
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.7 (1948. 7) ,p.388(24)- 402(38)
JaLC DOI	10.14991/001.19480701-0024
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480701-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コムミュニティーとしての都市

奥井復太郎

（一）

日本が民主的文化的再建の方向にむかつて經濟、政治社會の諸方面で著しい變革を遂げようとしている事は今更あらためて說くまでもない。吾々をとりまく、生活のあらゆる面で革新の必要が叫ばれている。その一つとして所謂新生活運動が前の片山内閣に於いて取上げられた。此の新生活運動は都市といわず農村といわず、凡そ吾々の生活のあるところ、その精神的物質的乃至は行動的な全方面に亘つて遂行されなければならないものでありながら、此の種の運動に通弊である一時的興奮性から脱却して恒久性を持つに到つていない。其の根本の理由は何處にあるかと云えば此の運動の哲學、つまり背景をなす理論が充分に檢討されていない事に歸せられると思う。全般的に見て施政者の生活に對する理解と觀念とは低く雜薄であるように親われる。

生活改善論者は衣食住に於ける合理化を云い新工夫や新技術の採用を奬勵する。それは吾々の生活のよつて立つ基盤とそれが持つ體系とに對して餘りに無頓着である。又、生活科學と稱せられるものも生活の特定分野に、主として自然科學的技術を採用する事丈けの主張に過ぎぬように思われる。

しかし本稿では斯くの如き意味での生活論を展開する意圖はない。むしろ目的は、こうした生活がその内で行われる一つの枠としてのコムミュニティーの問題を考えて見たいと思うのである。コムミュニティーとは何か、或いは、都市とは何かという問題を改めて考えて見る必要があるのではなかろうか。

戰災都市の復興が緊迫せる問題として提起されている。復興都市計畫は從來にない程深い市民の關心をひいている。都市は市民の生活々動の基地として合理的に整備される必要があり、都市計畫は其の意味に於いて單なる土木・建築工學的關心のみの領域ではない。吾々は之れが市民の生活設計につながる可きものでなければならぬと主張したい。こゝで再び生活設計に云う生活とは何かという問題に戻る。併し玆に云う生活設計も當然、集團的生活設計である事は特に注意するまでもなかろう。この生活集團の問題をコムミュニティーの問題として取上げたいのである。

（二）

吾々の生活は其の基本的經濟關係の變革に伴い、新しい技術的進歩を受けて著しい變化を經驗する。明治時代の東京市民は五百萬七百萬という東京都を具體的に豫想する事が出來なかつたであろう。交通は社會・經濟關係を表示するが、鐵道時代と自動車時代とでは既に吾々の生活の在り方、集團形態の著しい差異を示す。産業革命の都市が蒸汽動力の工業都市を代表型とすれば石油及び電氣動力の都市は所謂メトロポリスを典型化している。前者は數萬乃至數十萬の人口を持つ都市であるに對し後者は數百萬の人口を持ち、且つその周邊に夥しい從屬的中小都市群を從えた巨大都市である。前者は煙突の林立する黑煙濛々の都市であるのに對して後者は高層建築の聳える無煙都市である。前者が勞働者の都市であるならば後者は勞働者の外に夥しいサラリーマンを持つた都市である。此の集團形態の相違

は又、生活相の相違でもある。勤勞文化は勞働者を中心として唱えられながら、現代大都市文化は少なからずサラリーマン的な樣相を持つている。

都市と農村とは對蹠的に觀察されるが、其處に取り上げられる都市とは昔の、或いは十九世紀の都會、現代で云えば地方の中小都市ではない。農村と明かに對蹠的になつている都市とは前揭のメトロポリス的大都會、廿世紀の產物としての大都市に外ならない。「世界經濟に於ける資本主義經濟の活動が敏活となるや、玆に完全なるウルバニズムの傾向が現われて來た。之れは勿論、時代的に見れば二十世紀に於いても十年代以降の所產である。ウルバニズムは資本主義の完成について同じく完成したと云つていゝ。此の時に於いて嚴密な意味での都市と農村とが對立した。社會機構に於いても富に於いても、又風俗習慣に於いても、兩者はその多方面に於いて對蹠的となつて來た。」

此の情勢は社會學界に於いて都市社會學の一派を誕生せしめたのであるが、從來から「町と村」という意味に解釋されていたコムミュニティーの觀念に、此の實體的變化に伴う修正が必要になつて來たのである。又此の故に都市社會の混亂に對する對症態度としてコムミュニティーの社會學的研究や合理的對策設計への探求となつたのである。

玆に Changing Community〔C. C. Zimmerman 1938〕と云ら Awakening Community〔M. Mims and G. W. Moritz 1932〕となり、そして Community Problems〔A. E. Wood 1928〕Community and Social Welfare〔C. C. North 1931〕Community Organization〔J. F. Steiner 1925〕ということになるのである。

誠に大陸大洋の橫斷が月日でなくて時分を以つてはかられる今日、分析すれば驚異に値する樣な極めて複雜多樣の組織的社會關係、夥しく且つ變化極りない急速な「動き」、捉われない自由自在な生活利便等々を持つた今日を、變化のない傳統的で平靜な、百、千又はせいぜい萬を以つて勘える事の出來る田舍や町の生活と比較すれば、現代に於いてあらゆるものが實態的變化に相應する觀念的變化を持つのも當然といわねばならない。然かも此の兩面に於ける變化に當然生する時間的な「遲れ」は Social change—Social Disorganization の過程的現象となる。

（二）

從來のコムミュニティーの觀念は定限された地域と住民の統一觀念、殊に所屬觀念に重點を置いていた。勿論コムミュニティーの觀念は此の外に生活共同體ともいう可き要素を加えている。卽ち「或る程度纏まつた相接する境域に住み、生活の主要關心事について共に行動しようとする人々の集團」といわれる。更に此の生活共同體は「或る程度自足的」であり「自存的」であるとも考えられる。

こゝに擧げられた三つの要素に就いてはなお嚴密に考察しなければコムミュニティーの正確な觀念は得られないが、假りに此の程度の考え方を以つてコムミュニティーを眼前に想起すると吾々は恐らく前代の町や村、今日で云えば田舍や地方都市の姿が浮んで來るであろう。百萬を單位とする現代大都市は上述の樣にあまりにもかけ離れた現象である。

成程數百萬の人口をもつ大都市にも一定の境域はある。併し其れは一府縣又は一郡の面積に比敵する。其の都市の全景は到底一望裡におさめる事が出來ない。高速度の交通機關を利用しても周邊に達するに一時間近くの時間距離がある。一隅の居住者は他の隅の市內を全く知らない。所屬感は名目的には持つている、しかし强い鄕土感にまで高められたものではない。Citizenship はむしろ特定の町の市民と感ずるより國民性格としての Citizen と感ぜられている。一面、生活共同化は決して僅少ではない。併し市民の生活關心は雜多で自由で決して土地的に拘束されない。「町」

に對する忠誠感は到底望めない。此の意味での、住民に對する「町」のパアソナリティーは缺如している。

此の現象からリンドマンはコムミュニティーの觀念は單純から複雜へと移つたと考える（セリグマン編集「社會科學百科全書」「コムミュニティーの項參照）この單純で舊來の觀念を彼は構造的概念とし、一定の行政上の境界を持つた地理的境域で其の住民が相互關係の經濟活動に從事していて更に行政上自治單位となるもの、併し郡府縣、州、國の樣なもつと大きい社會單位の一部分をなすものと示している。故にこゝでは地域と經濟活動の組織と獨立行政體の三要素が取り上げられている。

併し工場制度會社組織を根幹とする經濟活動は、こうした境界を突破しているし、市内の製造場も他の地方人の所有である場合が多く、市内生産の財貨も地元消費を目標としない。機械生産ともなれば工匠制は益〻必要が無くなり、工場の勞働者は著しく流動的になつて來る。運輸交通通信の發達はコムミュニティーを益〻柔軟化し自存性を弱める。かくして住民の生活關心も地域・職能的なものから專ら職能的關心へと著しく移行して來た。同時に生活觀念には著しい系統的な分裂が生じて全人格的な綜合面より、生活々動の一支面による關心結合が强まつて來た。

斯くの如き狀態では「地域」觀念に中心を置き、全人格的包括をもつたコムミュニティーの崩壞は當然とされなければならない。リンドマンは此の構造的概念に對して過程概念を對立させている。此の過程は人間性情の觀念で解釋され社會動態はあらゆる種類の社會集團化の裡に他人と相互作用を營む個人の關心、意志、願望、目的等の裡にひそんでいると見る。つまりコムミュニティーとは人間性情とその衝動とが表現される社會集團化の一つの型である。そういうものとしては社交性、親和性、或いは鄕土性等の心理的現象が一種の凝集作用として表面に出て來る。

既に一部指摘した樣に吾々は職能的關心を持つている丈けでなく今日では此の關心がより重くなつている事に氣がついている。此の關心は一つの凝集作用として働く。學藝の人々は屢〻國境を超越して結びつく。同樣に資本は國境を無視し、萬國の勞働者は團結をする。此の凝集作用の前には國も町も村もない。所謂非コムミュニティー的過程があり、若し地域的結合を以つてコムミュニティーとするならば、むしろ逆に反コムミュニティー的な現象ともなる。

吾々が此の超地域的乃至は非空間的な凝集をコムミュニティーと考える事は、都市又は大都市を研究の對象とする本問題の構想の前提に於いて既に排斥されなければならぬ。即ち村とか町、又は大小の都市、こうした地域集團がコムミュニティーであるかどうかということ、更にどんなコムミュニティーであるかを探求する事から出發しているので、又現實に吾々は何等かの形態に於いて地域集團をつくつているので、地域・空間を無視して了う態度は相容れないものである事は申すまでもない。勿論かく云つたからとて超地域集團的な關心や凝集作用を予定するのではない。反對にコムミュニティーを一つの過程と見る場合に、此の凝集作用と地域との關係、即ち地緣關係に吾々の考察を限らねばならぬということを主張する丈けである。空間的接近に關連する一連の過程を掘り出して來て、コムミュニティーの過程概念としなければならぬと見るのである。

（四）

社會は「動き得る個人同志の空間的距離關係である」という命題もあるが、空間的に相接している事から一つの「何もの」かゞ特別に生れるであろうか。人間の社會關係は多樣複雜である故に社會的に「何もの」かゞ生じた時、それが假に空間的接近に基因していると思われ、觀察される場合でも、他の諸因子が介在している事は免れないのが當然である。

俚俗に云う、途上のすれ違いにも他生の縁を認め、隣人を好ましきものと想い、遠方の身寄りより近くの他人に頼り、去る者日々に疎しという關係は、果してどういう性質のものであろうか。社會的に「無」から發し、地理的接近の事實から何かの「有」が生れるという事であろうか。こゝに生れる社會關係は、勿論特殊のものである。例えば通行人、隣人いずれも共に屬する大きな社會の一員（國民、市民等）である事は云うまでもない。それにしても共に居るという事から特に生ずる關係は確かに一つの社交性、同類又は同好意識或いは群衆意識が生れる機緣にはなる。盛り場の人出、同車内の乘客達、近隣社會の隣人達で生み出される關係には確かにこうした系統に屬するものがある。

併しコムミュニティーを論ずる場合に、斯くの如く單なる地理的接近だけで生れる社會的關係を神經質に追及する必要はない。蓋し地緣社會としてのコムミュニティーは純粋に地理的接近丈けで生ずる社會關係でないから。換言すれば土地・空間を共にする事によつて吾々人間の間には多種多様な關係が生れて來るからである。

具體的に云えば經濟・政治又は行政・文化其の他の諸關係が自ら發生して來る。即ち「近く共に住うという事實は、或る程度の相互依存と相互作用とを齎らす傾向がある。」

例えば人の定住にあたつて治安の維持は最も必要なものゝ一つである。從つて定住の地を共にするものは其の目的の爲めに當然協力する。又、經濟生活の確立は各個にとつても尙一層重要な關心事である。此の場合、各個は所謂自給體制に於いて其の必要を滿すことも出來るが、協同體制でよりよく其の目的を達する。必要なる財貨及びサービスは自ら生産しても差支ないが、市場に於いて獲得しても結構である。否むしろ經濟發展の傾向は狹い地域に於ける孤立自給的な形態から廣い地域に亙る協同組織の形態へと移つて來ている。其の他各種の生活利便は此の協同體制の裡に於いてはじめて各個にとつても可能となる。それ故に地域を共通にする事は附隨的に各種の社會的關係、各様の組織を生み出して來る。コムミュニティーは過去に於いても現在に於いてもかゝる地域的組織體として發生し且つ存在しているのである。コムミュニティーの觀念のうちに「生活或いは生活の組織を共にする」という意味が多くの場合含まれているのは此の關係を指すに外ならない。「是等の人々は凡べて同樣な問題に當面しているのでそれを解決するのに一緒になろうとする。この事態が現實に起れば其處に一つのコムミュニティーが出來上る事となる。」

（五）

此の生活共同體の觀念は「主要なる生活事項に於いて協働する」ものといゝ、「共通の關心によつて繫がれる」といゝ「何等かの本質的に重要な必要を協同方式によつて充足する必要と利便とで結合されたもの」という表現に現われている。或いは「通常の個人の生活が營まれる共同生活の小さい核心で」「その土地の住民の日常の經濟・社會活動が共の地域の共同な組織體系を通じて營まれる地域」と觀察され都市の場合には「水道、燈火、衞生、動力等の公益事業が共通の問題となる市街地域」と考えられる。故に「コムミュニティーは多數の機關を持つて、雜多な目的にかない、住民をして其の境域内で彼等の生活の大部分を暮せる樣にする。」

是等の目的及び需要に應える機能的方面としては、「商業、金融、教育、宗教、厚生、規律及び防護」の諸系統を指摘し、或いはコムミュニティーの經濟的基礎事實として「共通なる生存の基礎として給水、農耕地、木材、埋藏鑛物。共通なる經濟機關の利用として商店、倉庫、囘漕施設、銀行」を擧げるものもある。此の點に關連して「中心」の觀念が出て來る。コムミュニティーは單なる住民の雜居形體でなく、その全部又は一部を集めて組織化されているとすれば其處に組織體の中心が現われて來る。「コムミュニティーは多かれ少なかれ自足的で、自體の關心の中心を

持ち得る丈けの大さを持つた社會集團である」其の中心とは商業の中心、社交の中心、教會、學校、共濟組合支部、圖書館其の他住民の必要とするが如き他の機關ということになる。中心は當然圓周を持たねばならない、此の圓周が卽ちコムミュニティーの地域にあたるが、凡べての中心の半徑が同一であるとは云えない。が、重要性のある中心としての經濟的關心から云えば、「一定の領域の內で財貨を生產し販賣し購入する人々の凡べては此の表象によつてそのコムミュニティーの一員である。そこで是等の人々を全部包含する樣に境界線が引かれる。」之れが卽ち「圈」と稱せられるものであつて「生活圈」「勢力圈」又は「商圈」という樣に用いられている。之れが前述した樣に宗教、教育、厚生其の他の關心系統に於いて成立することになる。

（六）

此の組織化と中心構成とから所謂所屬感が生れる。一體此の種の結合には目的意識的結合と非意識的結合があり、自發的結合と他力的結合とがある。商工會議所、倶樂部、地方行政府の如きは目的意識的結合であるが、一般の市場、商店街盛り場の如きは目的意識的結合とはいえない。自發的結合は民主的性格を持ち、他力的結合は支配的性格を持つ。

併し其のいずれにせよ、中心に結合した場合には强弱の程度差はあるが其處に「所屬感」が生れる。市場商店街の如きも、「自分の町の店」という感覺が生れて來る。論者によつて此の「所屬感」がコムミュニテー觀念として强調される。「共同の活動によつて特色づけられた地域的集合體で、之れに對し住民が何らかの所屬感を示すもの」であり、精神的には「相互扶助の爲めの仲間及び結合の感念」である。此の點から現代の、殊に大都市社會はこうした統合を缺いていると觀て「地理的接近は密であるが、趣味、習慣、言語に於いて類似のところ少なく、相互に同感及び理解が少ない」とし「中立、無關心、相互蔑視」という關係が支配する故に、大都市をコムミュニティーの觀念からは外すそうとするものもある。併し現代に於いては是等結合の全部を有意識的結合の型にのみ求め樣とするのは無理であり、むしろ此の點で問題になるのは結合形式が一元的であるか多元的であるかの相違だと思われる。田舍の町や昔の町に於いては所謂機能分化が充分に行われていないで全生活面が不可分に全體的形態を持つている。故に此の場合、結合は一つであつて然かも全部であり、同樣に所屬感も全體への所屬感が最も强く且つ上位的である。此の意味でかゝるコムミュニティーは獨自の個性なり性格を持つと云える。嚴密な意味での鄕土色、地方色とはそう云つた現象である。

反之、大都市に於いては生活の機能的分化と共れに基く結合の多樣性が極めて著しくなる。其の結果、各人はその生活の各相に於いて各〻異つた結合を持つ爲めに、全體的所屬感の成立は一應妨げられる。行政的に見れば都市の住民は全部が市民として全體的に纏められている筈であるが、是等の大都市にあつてはそれは屢〻名目的結合と稱せられるものに墮しやすい。事實、現代の大都市は市民の利害の爲めに可成徹底的な共同組織の主體となり、共同生活の利便に對して取計らう所が多いにも拘らず、此の組織への參加は必ずしも市民に强力な全體的結合感を與えない。市事業を利用するか、私營事業を利用するか、そのいずれかについて市民は殆ど特別な關心を示さない。彼等は特に「市」のものたる故に愛好や執着を示さない。市設のマーケットも普通の商店街も彼等にとつては特別差がない。水道が市營であろうと私企業であろうと、「サーヴィス」本位の標準によつて同列に評價される。此の意味でかゝる大都市の市民は精神的に全くコスモポリタンであつてローカリスティックではない。

併し彼等が其の居住に於いて地元の提供する生活の利便やサーヴィスに結合している事は否定出來ない事實である。故にかゝる機能分化的、特殊關心的結合の形態をも一つのコムミュニティー形成的なものと認めない限り、換言すれば全體統一的綜合的で、先ず單一的な結合感を持つた領域内で全生活が行われねばならぬと考える限り、現代大都市はコムミュニティー崩壞の過程に置かれているものである。そしてコムミュニティーに對する新舊の解釋がこゝに岐れる譯である。

此の解釋の相違、本質的にはコムミュニティー實體の變化は、吾々の生活關心が特定の生活地域に局限されなくなつた事に基いている。舊いコムミュニティーの崩壞因子は現代的な「動き」であり交通である。一國は既に通達無碍となり、全世界も現在では短時間内に交通し得る樣になつて來た。機能的分化は、その特殊化の過程に沿うて地元の領域を逸脱して全國的乃至全世界的に結合する。當然、かゝる生活領域に於ける關心及び觀念が鄕土的なものから國際的世界的になるのは當然である。

故にマッキーバアの云う樣にコムミュニティーを現實に局限する所のものは現實的な交通の限度ということである。そして事實、經濟、政治、貿易、商業、學藝、文化、あらゆる面の人間生活に於いて世界が一つのコムミュニティーになつて來ている。社會改良的な論者は、之れを友好的人間の世界的共同社會と呼ぶ。だが冒頭にも述べた樣に吾々のこゝで問題にするコムミュニティーはこうした大きな世界社會乃至は國民社會の問題でなく其の内に包まれる村や町や大都市の問題なのである。故に論者は是等のものを小さいコムミュニティーと呼ぶ。そして其の存在意義を求め樣としている。「是等小さいコムミュニティーは從前の全一性を失つては來たが大きいコムミュニティーに包攝される事によつて消滅してはいない。吾々は文明人としてコムミュニティーの大きな圈域を必要とすると同樣に小さい圈域をも必要とする。小さい世界に於ける生活に於いて吾々はより身近かでより親近な滿足を見出すが大きな世界は一段と豐かで變化に富んだ文化の持つ機會、安定、經濟、及び不斷の刺戟を吾々に齎らす。

（七）

現代大都市の住民の關心が機能分化的で其の限りに於いて狹い世界の領域を逸脱している事は卒直に認めていゝ。併しそれだからといつて居住に基く狹い地域的生活集團の存在が無くなつて了つたのでない事はマッキーバアの指摘する通である。のみならず、そうした狹い地域生活集團の持つ意義すらも決して減少したとは思えない。こゝで別個の見地から其の意義を檢討してみよう。

狹い世界の持つ生活的な意義をマッキーバアは「身寄りの親近的な滿足」という言葉で表現したが、自分は之れを生活理想の實現化の過程即ちレアライズする過程として把握したい。

吾々は各種各樣であるが特定の生活理想と一定の生活手段とを持つている。此の具體的な手段を通じて吾々の生活理想は然かる可く實現することゝなる。此の實現の場所こそ吾々の生活の本據となる居住個所であり、此の實現の樣式こそ、所謂吾々の日常生活である。

吾々の生活關心が村や町の圈域を越えて逸脱するという、或いは其の結果一つの國際的性格を持つという、是等の現象や事實には間違がない。しかしそうした關心や理念、或いは理想は、風の如く飄々乎として不定の空間に所在するものであろうか。否、そうした理念や關心は虛空に浮動する生活（假りにそんなものがあり得るとしたら）から發生するものであろうか。

云う迄もなくそのいずれもあり得可からざるものであろう。假りに學藝の關心は國際的であるという。併し其の關心は學藝的生活の可能な所から生れ、學藝的生活の内から生れ出る。プロレタリアートには祖國が無いという。しかし其の生活觀及び生活理念は、現實の勞働生活の内から生れ出るより外に現われる方法はないのではなかろうか。又國際的に通ずる吾々の生活關心も、たゞ座して其れを祈念している事によつて、實現されるものでなく、現實に國際的に通ずる何等かの組織又は施設と結びつかなければ具體化されて來ない。

具體的な例をとろう。國際性の最も顯著なものとして學問藝術文化の系列について見れば、學問的關心は學問探究の生活が可能なる所に於いて先ず成立せざるを得ない。玆に於いて學術研究の施設、學校等が其の土地に存在し、それに關與する生活機會に惠まれる必要がある。研究の資料や研究施設、研究發表の機關及び組織等が必要であるのは云うまでもなく、若し國際的關心を持ち、それを實現する爲めには、其處に國際的連絡の組織と機關とが必要となる。それは通信交通の機關でもあろうし、國際的集會の施設でもあろうし、或いは圖書雜誌を中心とする商業的機關でもあるであろう。

或いは音樂の場合に就いても音樂學校、研究所、樂器店、演奏場、樂團等の存在が必要であると共に國際的にはラヂオなり蓄音器による連絡媒介の方式が必要であり、或いは外國、樂團の招聘ということも考えられる。美術の場合又然かりである。

そして最も重要なことは、是等の諸條件や諸施設を具體的に其の土地に持たなければ、云うところの大きな世界への關心も實現しないという事である。故に換言すれば、狹い地域を逸脱するといわれる生活關心も生活理想も、現實には其の土地の内に此の大きな世界を代表し連繋する組織と施設とを持つ事によつて、大きな世界の縮圖のうちに收められているに外ならない。一國の首府は最も對外的國際的關心の濃厚な土地である。それ丈け首都はその國際關係を縮圖として示している。外國公館、外國商館、强力なる通信網、外國港灣等々、いずれも對外的關心と活動とを實現している地元の機構であり施設である。

先きにプロレタリアートに就いて述べたが之れ又同樣である。萬國のプロレタリアートに團結を迫つても、肝腎な勞働者が特定の國の、特定の場所で、プロレタリアとしての生活を實現していなかつたならば、どうにもならぬであろう。要するにかゝる意味での關心や理念は、其の地域を超越する限りに於いて、現實の生活の具體性を普遍化し抽象化した存在である。故に土地を離れたと思われる生活理念も、現實には土地に結合されたものだと云わざるを得ない。

（八）

土地に制約されない吾々の生活々動に就いても前項に述べた樣に其の土地に何等かの手懸りが無ければならぬ事が明らかになつた。まして其の土地に依存する所謂日常生活の大部分が地域的結合を生み出すことは云うまでもない。假りに食料品、日用雜品に就いても吾々は他國製品を入手する時、土地の市場又は商店に依存しなければならない。通信販賣に就いても郵便局に依らねばならない。通信販賣は、物資の供給について地元の市場を脅かす一要因であり、又百貨店の配達制度は屢〻、大都市隣接の町の市場に脅威を感ぜしめている。又是等の所謂衛星都市と中心都市とを結ぶ交通の發達は、後者の住民が其の生活關心と實現とを便利な交通線によつて結ばれる中心都市で果すという結果になる。

是等の事情から現代のコムミュニティーは決して一様な存在でない事は明白になる。凡べての生活が悉く其の地元で一様に完了している型のコムミュニティーのみを今日望むのは初めにも述べた様に十八、十九世紀の形態に執着し過ぎるものである。

併し茲で問題になるのは尨大な地域的擴張を持つ巨大都市（屢〻其の意味で過大都市と呼ばれている）と之れを取卷く、單なる住宅地的小都市群、更に地方都市乃至は農村の極めて貧弱なる生活文化の樣相等である。此の意味でコムミュニティーは原則的に基本的な生活需要が地元で自給される（直接的又は間接的に）事が今日の要望となつているのである。米國の都市社會學は大都市の地域的構造から是等大都市が多數、多樣なコムミュニティーの合成體であると觀察した。是等の合成單位の小コムミュニティーは運輸交通通信を機緣として都心地區に繫がつている。それは丁度、大都市周邊の衞星的都市群の存在にも似たものである。是等の場合に吾々は無用で且つ混亂をのみ惹起する交通を制限し、土地に安定する生活の可能である樣に整備する事が必要と思う。此の事は地方都市の場合や農村の場合に於いても同樣に云われねばならない。是等の問題は一方に於いて國土計畫乃至地方計畫の擔當部面であろうが、都市經營に於ける生活設計の分野でもある。其の爲めには吾々の日常生活の個別的分析、生活理想と生活能力の調査、生活關係技術の研究からその集團關係、並びに組織及び經營原理に亙つて考えられる必要がある。此の問題は別の領域に屬するから、茲では割愛する。

生糸恐慌と製糸業勞働者の勞働條件（上）

金子八郎

過重勞働と低銀を基盤とし、增大するアメリカの需要によつて第一次世界大戰後に至るまで一種の獨占的超加利潤を獲得して來た――これを裏から言へば經營は極めて放慢であつた――わが製糸業も、大戰後斷續して發生する幾多の恐慌と、中國糸及び人絹の競爭に曝されて、漸くその糸價は下向線を巡り始めた。一九二九年末に發生した世界恐慌は、かゝる狀態に低迷する製糸業に決定的な打擊を與へて、製糸業を未曾有の恐慌の渦中に投じた。

斯る未曾有の恐慌の渦中にあつてこそ、それ自身が內包する矛盾も、資本對勞働關係の一切もが、その本質的な姿を最も露骨に表出する。從つて此處に於ける私の意向の第一は、それを指向しつゝも今迄果し得なかつた事業主對勞働者の關係を、恐慌の過程を分析することによつて直接的に把握することである。

既に見た如く、この恐慌の第一次的な原因はアメリカ市場の梗塞であり、それを助成したといふ意味に於いて人絹、支那糸の侵出が考へられる。これが恐慌發生の直接的な契機ではあるが、恐慌の推移はこの外部的なものと、製糸業內部とそれを直接圍繞する部門との反應作用の複合の結果であることを忘れてはならない。かゝる意味に於いてこの反應の仕方は極めて重要である。諸々の要素が其處に働くのであるが、我々は論文の主題に從つて反應として出現した勞働條件が、逆に恐慌に對し如何なる作用を及ぼしたか、又その恐慌が再び勞働條件をいかに規定したか、この相關作用が結局製糸業自體に對して如何なる影響を及ぼしたかを考察する。これが第二の課題であるが、これが究明も又恐慌の過程の分析によつてのみ達せられる。

從つて私は第一、第二の課題を果すために出來るだけ詳細に恐慌の進展を考察するであらう。

先づ製糸業の景氣を最も端的に示す糸價の變動は第一